

IDACAだより

第10号 平成25年9月20日

● 編集発行
(一財)アジア農協振興機関
責任者：平岡啓治
東京都町田市相原町 4771
TEL: 042-782-4331
FAX: 042-782-4384

～IDACA50周年記念号～ 日本と世界を人をつないだ50年 記念事業報告

IDACAは平成25年7月8日をもって設立50周年を迎え、8月8日に東京都内で50周年を記念する「IDACA半世紀・感謝の夕べ」を開催しました。

IDACAの設立は、1963年7月8日で、前年にJA全中が開いた第1回アジア農協会議で、アジア地域の協同組合を対象に研修、調査、開発の協力事業を行うことが決議されたことを受けて発足しました。

初代理事長は、当時の全中会長、荷見安氏で、戦後のアジア新興国の食料・農業事情を見て、わが国の農協はアジアの農協振興に必要な人材育成に協力すべきだと考え、設立に尽力されました。



ICA-AP事務局長千ヨイ氏より記念の盾を頂く萬歳理事長

設立にあたって国の支援に加え、全国のJAから拠出金を募りスタートし、まさに全国の農家組合員からの資金でIDACAができたと言えます。IDACAは「相互扶助」、「共存同栄」といった協同組合理念の普遍的な価値を人材育成というJAグループの国際協力活動を通じて体現してきました。

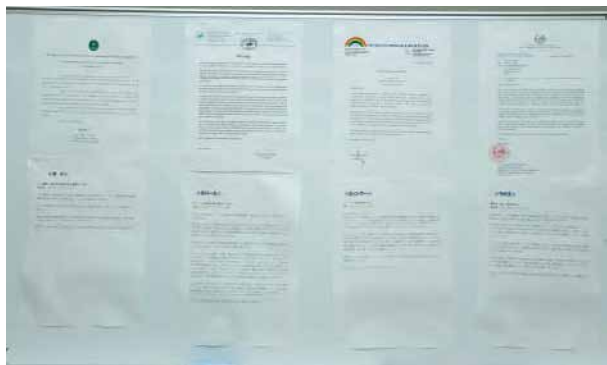
「感謝の夕べ」には農水省、国際協力機構（JICA）、国際協同組合同盟（ICA）などの関係機関、現地研修でお世話になったJAの方々など約80人の皆様にご出席いただきました。設立50周年の節目を迎えるにあたり記念誌とDVD



設立50周年を記念して作成した
記念誌とDVD

《目次》

- 「日本と世界を人をつないだ50年」記念事業報告..... 1
- 研修事業報告..... 3
 - (1) JICA「農業協同組合の組織化推進と事業運営能力の向上」コース
 - (2) ICA 農産物品質安全管理研修
 - ・ <特別企画>外国人のホームステイを受入れる際の心得とは？
- その他..... 6



**各国の国際機関から届いた IDACA 設立
50 周年を祝うメッセージ**

業、農協のよき理解者として育つようさらに努めてまいる所存です」と決意を述べました。

この半世紀の間に、IDACA が受け入れた研修員は 115 カ国 5,870 人に上ります。テーマに沿った現地研修や視察・交流を行っており、こうした IDACA の実績は JA のさまざまな協力がなければ成り立ちませんでした。IDACA で研修を受けた研修員の中には母国で農協幹部として活躍する人だけでなく、大臣や次官など政府高官になった方々もいます。途上国の農業・農協分野に日本の農業と JA の理解者がいることは心強い限りであり、また JA グループの国際貢献活動を通じて作られた人的ネットワークは JA グループにとっても貴重な財産です。

「IDACA 半世紀・感謝の夕べ」では、IDACA が担ってきた JA グループの国際貢献活動の使命と役割を再確認し、次の半世紀への新たなステップを踏み出す場となりました。

を制作し、50 年の歩みを紹介した他、国際協同組合同盟アジア太平洋地域 (ICA-AP) 事務局長のチャン・ホー・チョイ博士より、IDACA のアジア地域の協同組合振興への多大な貢献を感謝した記念の盾を頂きました。

主催者あいさつにあたって萬歳章理事長 (JA 全中会長) は、「今後、IDACA は協同組合運動を担う人材の養成を通じ、アジアを中心とする途上国そして世界との共生に貢献していくとともに、相互の望ましい発展に向けて研修員がわが国の農業、農協のよき理解者として育つようさらに努めてまいる所存です」と決意を述べました。



全中・村上副会長



JA いわて花巻・高橋組合長



全中・富士専務



農林水産省国際協力課・瀬戸課長



JICA・黒川理事



I & You 倶楽部・原田会員



お集まりくださった来賓及び IDACA とゆかりの深い関係者の皆様

 <研修事業報告>
(1) 2013 年度 JICA「農業協同組合の組織化推進と事業運営能力の向上」コース

国際協力機構（JICA）の委託を受けて、2013年5月7日から7月13日までの約2カ月に渡り、集団研修「農協の組織化推進と事業運営能力の向上」コースを実施しました。本研修にはアジアからカンボジア、インド、フィリピン、タイ、東チモール、の5カ国、アフリカからはナイジェリア、ウガンダ、ザンビアの3カ国より合計9名の研修員が参加し、日本の農協組織の仕組みや事業活動などを中心に研修に取り組みました。

現地研修では鳥取県及び北海道を訪問させて頂きました。鳥取県では、JA 鳥取中央会を

**日本中で有名な「ゲゲゲの鬼太郎」と（鳥取県）**

はじめ、JA 鳥取いなば、JA 鳥取中央、JA 鳥取西部と県内3JA 全部に訪問させていただきました。北海道では JA 北海道中央会、ホクレン、JA 幕別町、JA 士幌町などを訪問させていただき、スケールの大きな北海道の農業を視察。また長野県への訪問では、農産加工事業や女性起業活動の事例などを視察しました。講義や視察研修で得た知識や経験をもとにアクション・プランを作成し、発表会を行いました。帰国後、このプランを実行し、農村活性化のために活躍することが期待されています。



北海道 JA 士幌町管内酪農家訪問

(2) 2013 年度 ICA 農産物品質・安全管理研修

研修の目的は、農産物の品質管理や安全性管理を担う流通専門家の育成支援することで、第3回目の本研修は今回が最終年度でした。

今年度は6カ国9名の研修員が参加し、構成は行政官、農協職員、農家などで、参加国はブータン、インド、ラオス、ミャンマー、ネパール及びベトナム、研修期間は2013年7月9日から8月2日までの25日間実施しました。

研修前半はIDACAで関連テーマの講義やJA全農営農技術センター他近郊の施設見学が中心で、後半は現地研修とアクション・プランの策定を行いました。現地研修は兵庫県下で実施し、

開拓地における高原有機野菜部会の取組み、道の駅（但馬のまほろば）、ファーマーズマーケット（JA たじま）、コウノトリ育む農法に基づく環境創造型農業の実践、卸市場と連携した生産組織の農業生産経営、生協が取り組む安心安全な農産物の供給システム、中央卸売市場の運営、兵庫県庁の農業・農協振興政策、県立フラワーセンターでの見学者数向上の秘訣など学習しました。兵庫県下での研修後、大阪にも立ち寄り、大阪城を見学するなど日本文化や歴史の一端に触れる機会を持ちました。

<特別企画>

外国人のホームステイを受入れる際の心得とは？

今回は IDACA の研修団を何度もご自宅に受け入れ、日本の家庭の普段の姿を研修員に見せてくださっている兵庫県神戸市在住の金川さんご夫妻に外国人を受け入れる際の心得についてお話を伺いました。

IDACA：ホームステイを始められてどのくらいになりますか？

金川：最初に受け入れを始めてから 10 年くらいになります。最初は兵庫県と中国の広東省が友好提携している関係で中国人の女子大生を受け入れました。

IDACA：受け入れる外国人の選定はされるのですか？

金川：基本的に子供は受け入れません。なぜならコミュニケーションが取りづらいからです。また相手は本当に喜んでくれているのかどうかにとっても興味があるので大学生以上をお願いしています。話しやすいという点から男性よりも女性を選んでいきます。

**金川さんご夫妻**

IDACA：外国人を受け入れることに抵抗感はなかったですか？

金川：私はできませんが、家内は英語が話せるし、外国人にも興味があったので特に抵抗感はありませんでした。それと自分ができなかったことを子供たちにはやってもらいたいという思いがありますよね。その一つが国際交流であり、家に外国人を迎えることで 4 人いる我が家の子供たちにもとても良い刺激になっているのではないかと考えています。

IDACA：自宅に外国人を迎え入れるとなると何をどうしたらよいか分からず嫌になってしまうこともあるのでは？

金川：外国人のみならず、お客様を自宅にお招きする際、一番大変な思いをするのは奥さんです。奥さんの理解があるかどうか重要なポイントでしょう。自分は昼間仕事に出かけ、後の世話はすべて奥さん任せになってしまいますから。

IDACA：では奥様にお聞きします。お客様をお招きするとなるとお掃除や食事の用意など大変ではありませんか？

金川夫人：主人が掃除好きなので、我が家ではいつ誰が突然来ても恥ずかしくないようになっています。IDACA の研修員の皆さんがいらしたときもお風呂場やトイレ、台所などにとっても興味があるようでしたので、自由に見ていただきました。

**2013 年度 ICA 農産物品質・安全管理研修で金川さんが館長をされている兵庫県立フラワーセンターを訪問**

IDACA: ここは入ってはダメとか、こういうことをされては困ると言った制限などはありませんか？

金川: 特に制限などはありません。なぜなら身元保証人は県の斡旋担当の方であったり、IDACAの職員の方であり、その方たちとの信頼関係を前提としているので、安心して受け入れていきます。もちろん、飛び込みで家に泊めて欲しいと言われたら断るでしょう。身元がしっかりした人たちなのでとくにガードを固くしないで受け入れていきます。

IDACA: 今までにトラブルになったことなどはありますか？

金川: 外国人の方々は困ったと思っているかも知れませんが (笑)、自分たちが困ったことはありません。短期間の受入ればかりなのでトラブルになる前に終了してしまいます。我が家ではありませんが、知人宅でイスラム教の研修員を受け入れ、食事に大変苦勞したという話は聞きました。



金川さんご自宅での研修員受入れ

IDACA: 受け入れてよかったと思うことはありますか？

金川: 短期間でも一緒に過ごせば情がわきます。別れるときには涙が出ます。このような草の根レベルの交流はとても重要であると思います。たとえば自分が爆弾のボタンを押せる立場にあったとしても自分の家に来てくれた人が敵国にいたとしたらやはり爆弾を落とすことに躊躇するでしょう。このような小さい交流が積み重なれば諍いも少なくなるのではないかと考えます。それがひいては世界平和につながっていくのではないのでしょうか。

IDACA: 最後に外国人を受け入れるときの心構えなどありましたらお教えてください。

金川: 肩の力を抜き、自然体でありのままの家族を見てもらうことでしょうか。うちではお客様が来たからと言って特別なことは何もしません。誰が来てもうちの子供たちは普段通りの状態で接し、またそれぞれが自分のしたい事をしています。

金川さん、貴重なお話しをありがとうございました。「自然体でお客様を迎える」というのは実は大変難しいことかもしれません。普段作らないようなごちそうを用意したり、暮れの大掃除も顔負けで家中を磨き上げたりして、お客様を迎える前に相当疲労してしまうのが実情なのではないでしょうか。肩肘張らずに外国人を受け入れ、交流することを楽しめればホームステイは病みつきになるかもしれません。



インタビューする平岡常務理事と金川夫妻



＜その他＞

日本農業新聞からのお知らせ 「英字版ニュース」ホームページ開設

日本農業新聞は日本版に掲載した記事を英訳して掲載する日本農業新聞「英字版ニュース」ホームページを6月10日に開設。このウェブサイトには環太平洋連携協定（TPP）交渉参加問題、食糧・農業問題などの記事（論説含む）を毎日数本ずつ英字ニュースとして載せていくことで、農業新聞やJAグループの主張を広く世界に発信することを目的としている。

また、昨年の国際協同組合年を契機とした協同組合セクターの国際交流の増加などの内外情勢から、日本農業新聞やJAグループの主張を世界に発信していく意義は大きい。英語専用のウェブサイト「英字版ニュース」の開設により、さらに海外からの閲覧が円滑になり、TPPの危険性、食糧自給の重要性、日本の農協運動などを海外に発信し国際理解を広げる一助となるであろう。

ウェブサイト名は「The Japan Agri News」、アドレスは <http://english.agrinews.co.jp/> で海外から自在に閲覧できるようになっている。JA全中・全国連をはじめとしたJAグループの各ウェブサイトから「The Japan Agri News」へのリンクは自由。リンク希望や海外情報発信についての問合せは、日本農業新聞編集局農政経済部国際チーム

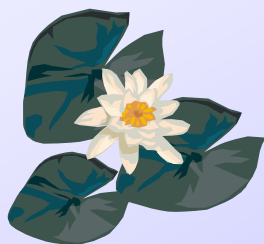
（担当：山田、齋藤、電話：03-5295-7427 まで）



訃報

JA全中の農政部長、総務部長を歴任し、退職後は新聞連常任監事・常務理事、国際農林業協働協会（JAICAF）常務理事としてご活躍され、パラグアイの農協振興にも専門家として深く関わって来られ、初代IDACA I & You 倶楽部会長でもあった山内偉生氏が7月28日にご逝去されました。

IDACAでは研修員に熱意に溢れた講義をして頂き、その後の研修員との懇親会でも得意のギター演奏でボブ・ディランの曲を歌い上げ、研修員から大喝采を浴びていらっしゃいました。



もっともっと研修員の皆さんと関わって頂き、そしてIDACAのご意見番として目を光らせていただきたかった方でした。ご冥福を心よりお祈りいたします。（合掌）